

手紙

島田真一

「大抵の書は読まぬがよい、大抵の文は書かぬがよい」とは幸田文さんのお父さん露伴翁の言である。和漢の書巻、およそ三千年ほどのものは野史雜書にいたるまで読み尽くし、しかも等身の著作のある人の言葉としては意地の悪いオヤジだナとも思われ、ナニ向う露地の豆腐屋の親爺もワシもその差どれ程のことがあらうという老狂の感懐とも受取られ、イヤつまりは詰まらぬ本は読むな、本を讀んでも本に読まれるな、資本（モトデ）のだからぬ、又聞きの詰まらぬことは文章に書くなということであつたかとうなずかれる。耳が痛い。

シナ事変が始まってしばらく後、翁の「竹頭木屑」あるいは平将門、源頼朝、蒲生氏郷論などの好篇は心に未練の残る

ほどの、酸いも甘いも渋味も溜りぬけた山淵の清水のような読みもので、今生の思い出に画仙紙と手紙を送って何か一字の墨書と願ったことがある。送った紙は送り返され、幸田内として「老年で只今どなたからの辞退しておりますから悪しからず……」との文面は文さんからもあつたろう。私は当時二十才代で、本の読みも浅く、ブンボンと文学だか文化だか、何を蚊の如き青二才めらがと軽くあしらわれたとて悔ゆる筋はない。

それはさておき。明治の末に成長した人達の友情について、昔の人はこうもあつたのかと感慨を深くせられたことがある。その人は昭和十五年に五十才で歿した熊本市下通町出身の平川清風氏である。清風はその頃、毎日新聞の常務取締役、編集主幹で大毎・東日の筆政を握っていた。大正のはじめ東大政治科を卒業してすぐ毎日に入り、四十五才で編集主幹となつた後は異常な努力精勵家であつたらしい。彼が編集室を歩き回ると、馬触るれば馬を斬るの概があつて社員は「マルデ日本刀の抜き身が歩いてくるようですヨ」と恐れていたという。

その彼が五高時代から死の年まで凡そ三十年間送りつづけた手紙、その後数年から今日まで凡そ二十五年間保存された手紙を披見する機会に恵まれた。大型の古トランク一ぱいハガキまで加うれば一千通に近いだろうと目測される。宛名の保存者は、元九州新聞主幹高木亮氏であ

る。二人は熊中第八回の卒業で中学時代机を並べた仲だという。清風の手紙によると、彼が室内無裝飾主義、草花一本さえ許さず、高木をはじめ中学時代の親友五、六名の写真だけを机辺に掲げていたことが分る。そして日曜もない程の激務山積の中から、長いのは巻紙三間ほどの細字の手紙、短かいのは数行のハガキを殆んど数日おきに認めている。その交友は世界的権威者、朝日文化賞受賞者などを網らしていることは先年山口白陽氏の雑誌「呼ぶ」に写真が掲載されている。

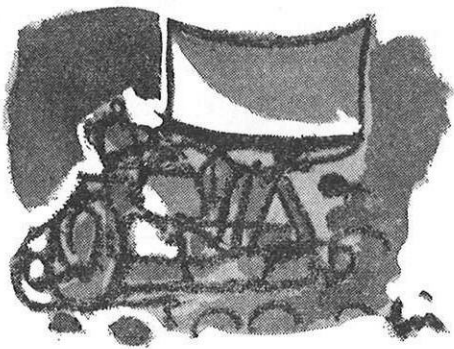
しかしこの書簡集の意義は、彼の友人がごとく天下の知名士であり、彼の接した人物に頭官、将星、公候、文豪が多いためではない。学生時代から王陽明を学び大塩平八郎の洗心洞割記を愛読したという彼の心情には富貴榮達の外飾をいつも冷然と眺めやる批判者の精神と子供っぽいほどの友情が終始流れている点に在る。早くも天保年間の初め、藩校時習館に洋学設置の建議をしてその書を焼かれた祖父清古（時に十八、九才）の赤い血は孫の清風にまで流れていたのである。（熊本年鑑編集者）

ふるさとの

母の味

松永喜美子

作ってやりたいと思っている。（熊本クッキングスクール）



黒四の女神

岩下雄二

五月の末に長野県に行った。新聞関係の会議で行ったのだが、スケジュールの一つに黒四ダムの見学があつて、有名な黒四（クロヨン）を見ることが出来た。黒四ダムはむろん黒部第四ダムのことだ、さらにダムという語も略されて黒四だけで意味が通じる。七月一日から一般に観光開放されることになっていて、非公開期間としては私たちが最後の見学団

ということだった。ところが、黒四に行くには長野県の大町市から行くコースと富山県の黒部峡谷をさかのぼるコースとがあるのだが、富山側のコースはまだ観光開放できない事情があるというので、富山県側が同時開放でなくてはいいやだとゴネているので、観光開放は一カ月ぐらい延びるということであつた。黒四に行くには大町市から日本アルプスの土手っ腹をくり抜いたトンネルを通つて行く。トンネルの長さが五キロである。トンネルを出るとダムがあるが、発電所と変電所は、ダムから十キロ下がつたところにあつて、そこに行くにはさらに十キロのトンネルと八百メートルのインクラインを経ねばならない。そのトンネルは中途でループしているのだそう、まったく大変なシロモノである。発電所と変電所はあそこが国立公園内であるので地上に建物を建ててはならないというわけで、すっぽり地下に埋まっただけだそうである。その発電所も変電所も、両方とも丸ビュグらしいの容積だというのだから、これもあきれた話である。ダムは高さが百八十何層かで、世界第二だそうである。ダムの堰堤の上から下を見ると、ブルドーザーが動いているのがグリーコのおまけの自動車ぐらゐに見える。インクラインが一時間に一昇降するといふので、その時間に合わせて最初に発電所の方から見てあとでダムを見た。



文明がすすみ、日常の生活が機械化されるにしたがつて、女性も何かと会合が多く、外出の機会が頻繁になつて来た。栄養の知識もゆたかで、戦後の子供のめざましい發育振りを見ても成程とうなずかせられる。唯何事も度が過ぎてはかえつて悪い影響を与えるようである。

私の知人に、「子供には才能教育を」と張切っている奥様がある。現在二才の男の子のために見事な献立が立てられている。子供を決められた時間が来ると椅子に坐らせ、たとえいやがろうとも無理に口につめ込むのである。子供は家での食事をいやがり、隣の家に遊びに行つてはその料理を手当り次第に食べあらず有様である。

私の親戚に近頃アメリカから帰つて来た娘がいる。二児の母親であるが、食べ物には全く淡白で、一週間分のインスタント食品を買ひ込んで、まず冷蔵庫に保管してある。料理は二十分以上かけては

アルプスの山々にはむろん雪が残っていたが、ダムサイトは残雪ではなくて、激しい雪が降つて来た。五月の末の雪である。工事が開つた氷雪の激しさが思われた。

発電所の中核はむろん発電機だが、三基の発電機は四、五十層ぐらゐの高さの宮殿のようなホールに並んでいた。といっても主要部はその部屋の、さらに下にあつて、上のホールにはエメサイター（励磁機）という部分が見えているだけである。地下の大宮殿の大ホールは綺麗な材質で張られていて、カラーコンデイニングが素晴らしい。人気はまったくない。夜はたった二人しか人がいないということだつた。

見学が終わつてから一行中の一人が、感にたえたような声で、いった。//あのトンネルも、あのダムも、すべて、あの三つの発電機を動かすためのものなのだ。

みんな同感だつた。夏を雪降らす峡谷の地下の大神殿の中に鎮座します三人の女神、それが三つの発電機であつたのである。トンネルを出て降り着いた大町の町はきれいに晴れていた。

（熊日論説委員）